

中国における農村調査研修

-福知山公立大学での国際版 PBL 教育事例として-

Study Training in Chinese Farming Villages: As A Case of International Program of Problem-based Learning in The University of Fukuchiyama

平野 真、張 明軍

Makoto Hirano and Mingjun Zhang

要旨

福知山公立大学で行われている「実践教育」(PBL=Problem-Based Learning による地域協働型教育)の国際版として、中国の内陸部四川省の成都市近郊の農村での調査研修プログラムについて報告する。中国の農村は周知のように長い間極貧に悩んでいた地域も多いが、胡錦濤政権以降の三農(農村、農業、農民)問題対策の中で、「農家楽」をはじめとする6次産業化政策が大きな成果を収めた。今回、大学生を引率して成都近郊農村への実地調査を行う国際交流兼教育研究研修を実施する機会に恵まれた。本稿では、この教育研修プログラムを通じた学生の学びを紹介しながら、調査結果を福知山市のまちづくりなどの課題に逆照射したときにどのような学びや示唆があるかについても考察する。

中国での調査において、産業と地域社会、地域の経済発展と住民の感じる幸福感との両立という課題はどのように見えてくるか、またそのことに学生たちはどう反応するのか、中国の学生たちとはどのような意見の相違があるのか、そうした問題意識を持ちながら、このプログラムを実施した。

キーワード: 中国、農業、農村、PBL

Keywords: China, agriculture, farming village, PBL (Problem-Based Learning)

1. はじめに：中国の地域課題としての農村問題

1990年代以降の鄧小平氏の改革開放路線により、中国が世界の工場として工業・製造業を中心に飛躍的に経済発展したのは誰もが知るところである。中国は2000年代に入り、驚異的な経済発展を遂げ、いまや世界の大国として君臨するようになった。しかし現在、約14億人とされる中国の人口の約半分は農村で暮らす農民と言われ、年収1億円以上の富裕層も200万人以上いると言われる中国において、依然として多くの農民は年収30万円にも満たない極貧にあるとも言われている。鄧小平氏の掲げた「先富主義（先に豊かになれるものから豊かになる）」の弊害として、中国社会の中で格差増大が顕在化し、2000年代の胡錦濤政権下では、いわゆる三農問題（農村、農民、農業の課題）の克服が大きくクローズアップされてきた。

中国の農村問題は、日本とは歴史的経緯も、スケール感も、大きく異なる。しかし近年における高度経済成長を背景とした中国での農村振興は目をみはるものがあり、後述するように、日本の私たちが学ぶべき点も非常に多いと感じる。本稿では、その中国の農村の視察と調査を国際交流・教育研究研修プログラムの一環として企画し、地域協働型PBL（課題解決型学習）教育のプロジェクトとして実施した内容について述べる。このプロジェクトを通じて、日本の学生たちが何を学んだのか、また中国との比較の中から、日本の地域問題がどのように見えてくるのか、考えてみたい。

プロジェクトの狙いとしては、以下のようなテーマについて、学生たちがどのように考え感じるか、現地調査を通じての気づきや成長を誘発することにある。

- 1) 日本と中国の共通課題としての農村活性化：農村の活性化は中国と日本との共通の課題でもあるが、そこで取り組み方の類似性と相違点を観察し、どのようなことが学べるのか。
- 2) 日本と中国の差異：グローバル化の中で新興国として産業発展してきた中国の経済成長を日本の衰退・停滞と比較しながら、そこから引き起こされる現象の違いについても洞察を進め、どのようなことが今後の日本にとって重要なのか。
- 3) 産業とまちづくり：福知山市をはじめ多くの日本の地域の活性化で問題となる産業発展/産業衰退とまちづくりの関係性について、中国の農村や都会の事例がなにか参考にならないか。

学生たちには、英語で自分たちの感じている日本の地域問題についてのスライドを作ってもらい、それを使って中国の学生たちに対して英語で発表をしてもらうこととした。そして自分たちの感じている日本の地域の抱えている課題について、中国の学生たちは何を感じるのか、日本の地域問題と中国での地域問題との間にどのような類似性と差異があるのか、英語による討論を通じて中国の学生た

ちの問題意識を聞くことを中国訪問の第一目標とした。プロジェクトに参加した学生たちの半数は地域の農村からの出身者であったため、農村での過疎高齢化、人口減少問題、耕作放棄地問題、限界集落化（社会インフラの崩壊など）について発表スライドをまとめていた。また中国の農村の活性化成功モデルの視察に対しても、非常に大きな関心を寄せていた。

2. 予備調査-四川省成都における農村開発

(1) 五金花農園の事業概要（平野・劉論文からの引用）

中国での開放政策は、当初、沿岸部の経済特区などを中心に行われ、鄧小平の「先富（先に豊かになれるものからどんどん豊かになれ）」優遇政策によって沿岸部と内陸部ないし都市部と農村部の経済格差は著しく広がった。しかし、胡錦濤国家主席、温家宝首相の時代になり、取り残されてきた農村部や内陸部の格差は正は大きな政策課題となり、「先富」政策は「共同富裕（みんなで豊かになろう）」政策に変わり格差の是正に向かった。そうした努力の一環として、内陸部の成都という都市の周辺に位置する五金花農園と呼ばれる農村での驚異的な経済成長が知られている。

平野は、10年ほど前に、当時日本の大学の博士後期課程に留学していた劉鳳氏（現・中国西南交通大学教授）とともに、この農園の現地調査を行い、研究結果を論文化している。以下、本節ではその論文から引用する形で、五金花農園の事業概要を紹介する。

この行政地域は、成都という地方都市から7キロほど離れた場所に位置し、16平方キロの領域に広がる五つの自然村落から成るものである。もともと地質的には酸性土壌であることから通常の農業には不利な場所であり、人々の暮らしは本当に貧しいものであった。しかし、この地で野菜栽培や生花栽培を行なうことを始め、しかも「花」を核として観光や家庭菜園などの新規事業を起すことで、この村落は飛躍的な経済発展を遂げた。「花」を核とした各種事業展開により、以前は貧しかった農村がわずか数年のうちに数倍から十倍近い収入を得る地域として変貌していったのである。

こうした変貌を遂げるには、当時まだ三十代であった女性村長とそのスタッフ・チームそしてこれらを指導する行政府による卓越した地域経営とビジネス構築によるところが大きいという。村長グループは、まず事業の基礎資金に恵まれないこの地にあつて、外資系企業の導入や合弁企業の形成により、花卉事業としての花園形成を図った。外資系企業からは、土地の貸し付けによる資金の流入だけでなく、花卉事業の事業ノウハウの移入にも努めた。このような先端技術も交易の歴史もない停滞した内陸部の辺境の地にあつて、通常は想像もつかない外資導入であるとか、合弁企業への土地の貸し付けによる現金収入の確保といった発想を生み出すには、経営スタッフの並々ならぬ地域活性化への意欲と行政府などによって提供される最新の経営知識が大きく作用した。基本的に資源がなく資金のないこの地にあつて、あらゆる施策のもととなる現金収入をどうやって実現し、しかも事業の基礎と

なる技術やノウハウまで獲得するのに、内陸部の貧しい村であっても海外との接触がヒントになるということは、それまで中々得ることのできなかった発想であった。

しかしそうした整備を行政側が整えても、当初村民はなかなかついてはいかなかったという。この村とは別の村での話だが、行政が農民に配った新種の米を農民は種まきに使わずに食べてしまったという話があるそうである。この話に例示されるように、行政の意図はなかなか一筋縄では農民には伝わらない。そこで村長チームは、村の人々と濃密なコミュニケーションを作り上げることに注力し、逆に村の人々の人間関係の中から、新しい事業へむけた気運を次第に盛り上げていったそうである。ここで重要なのは、単に外資企業を誘致し、村の土地を貸与して現金収入を得ただけでなく、得た収入により、事業展開に必要な道路などのインフラのハード面での整備のほか、税制や保証といった村民事業を支えるソフト面での整備も行い、また村民に研修を行い、農家の老人たちにもホテル経営やレストラン経営のノウハウを学ばせ、外資企業の作った花園の周辺に、農民自身によるホテルやレストランを展開し、観光事業によって農民が自立できるように仕向けていった点である。こうした施策が功を奏して、村民は自ら事業を起し経営する体質を身に付け、村の経済が急速に発展する基礎となった。

結果的には、外資や移入した技術・知識そのものではなく、農民自身が学び試行錯誤で行ってきたホテルやレストラン経営が飛躍の大きなカギとなったが、そのための条件を整え基本的な地域の競争優位性の核となったのは、外資によって実現した花園そのものであったことは明らかである。しかし、この価値の核をもとに、村民が行政の助成などに頼らず自ら経営力を身につけ自立し、そのことが地域経済振興のもととなったという事業過程は、実に多くのことを含蓄している。

その後、五つの村は、蓮、菊、スモモ、野菜、生花といった特色を出しながら夫々に全体の「五金花」村落を構成するようになった。それぞれの村で、菊、スモモなどといったテーマの花を決めて花園を形成することで、季節ごとにつねにどこかの村で花が咲いているように全体設計したのである。そして生花ビジネスだけでなく、都市部の人々への家庭菜園の提供、観光対象としてレストランやホテルなどの周辺ビジネスを勢力的に展開した。考えてみれば、この村落は地理的には二つの大きな国道の間に位置しており、都市部への入り口にあるという地の利の良さから、都市へ向かう人々あるいは都市部からの観光には適した郊外であったといえる。

更にその後、各村にそれぞれ異なる個性の美術館を建設し、村の中に芸術家の居住地域を作ってそこに芸術家を呼び寄せて住んでもらい、芸術家の製作した作品を美術館で展示・販売するといったことを行った。これは、更に季節に依存することなく、継続的に観光客を村に呼ぶための巧みな仕掛け作りといえる。こうした様々な工夫により、五金花農園には次第に全国各地から観光客が押し寄せるようになり、村の繁栄が導かれた。

中国の場合、地域経済振興の基となる事業の形成には共同体全域にわたる行政の指導が欠かせないが、一方限られた行政の力を最大限に効果に結びつけるためにも、民間の自立と私企業の育成が重要となり、日本とはまた異なるニュアンスでの企業と地域との連携が生じているという。

(2) 中国および四川省の農家楽政策

五金花農園の事業は、日本で言えば農工商連携や農業 6 次化による農業振興策と一脈通じるところもある。農業だけでなく、サービス産業などと組み合わせることで、農民の事業収益を増やし、農村の経済発展を図ろうという施策である。こうした施策は、三農問題克服の重要な政策として、いわゆる「農家楽」(観光型農園)による農村の貧困脱出策として、胡錦濤政権や四川省行政府によって重視されてきたという。

展(2008)の研究によれば、1980年代から1990年代に四川省を発祥の地として自発的に農家楽が生まれ始め、やがて全国に広がり、2000年代には行政府の政策として積極的に推し進められるようになったという。2005年末で、全省での農家楽は総計約1.7万戸に達し、約24万人の雇用を創出し、約8000万人の観光客を受け入れ、観光による収支額は約25億元に達したとの事である。このうち成都市の農家楽は約5000戸以上で、年間2000万人以上の観光客を受け入れたという。2008年には、中国全土で1万以上の村が農家楽を経営し、300万人の農民が農家楽で貧困から脱却し、農家楽の経営で、農家は平均数倍近い収入の増加を得ることができた。農家楽の成功の裏には、無論中国全体の経済成長と消費の伸びがあり、1995年に中国政府が週休2日制を制度化して以来、余暇を旅行や娯楽で楽しもうという全国的な消費傾向が、この農家楽ブームをもたらしたとも考えられる。

劉(2013)によれば、改革開放路線後の中国では観光産業を収入源の一つとして重視しており2001年から2015年にかけて中国のGDPは6.9%から14.2%の範囲内で順調に増大し高成長を遂げているが、さらに観光収入については、マイナスに落ち込んだ年もあるものの最大53.5%と成長率がめざましく、2015年には約3.4兆元(GDPは約68兆元)、2016年には約3.9兆元に達するという。2015年の国内観光者数も約41億人と、観光が国内の消費活動としても大きな要素になっていることがわかる。こうした背景の中で、農村振興策としての観光がクルーズアップされているのは理解しやすい。

また桂(2010)によれば、五金花農園に関して、2004年から2008年にかけて、四川省行政府は約1.8億元(約27億円)を投資して、インフラ整備を行い、また農民への資金援助も積極的に行ったという。2004年から誘致した大企業(花卉産業など)も約2億元の投資をおこなっているという。そして、五金花農園開発資金は、省政府30%、民間企業64%、村の共有資金2%、その他資金4%という比率であるといい、その使い道は、基盤整備40%、社会保険18%、民居改造補助金22%、農業産業補助金11%、農民教育9%とのことである。

こうして中国における農家楽は農村を貧困から救うために大成功した事例のようにも見受けられるが、一方で農家楽の問題点を指摘している研究者もいる。

森下(2008)は、雲南省の事例をあげ、農家楽により成功したものとそうでないものとの格差が生

じたこと、農家楽間の競争が激化したこと、外部の農民が流入して農家楽を行うことで村の独自性が失われる場合があることなどを挙げている。実際に、2017年度に平野と張が国際交流プログラムの下見に成都市の五金花農園を訪問した際には、外部の企業の経営する商店や飲食業の店が増え、もはや農村のイメージがなくなってきたことに強い印象を受けた。資本主義経済の発展のなかで、初期の素朴な農家楽の段階から熾烈な競争段階に入った観光業が、農民にとってどのような意味を持つものなのか、逆に興味を持つこととなり、この問題がこの教育プログラムを実施する大きな動機にもなった。

以上の予備調査から、中国の農村調査に向けてのいくつかの検証したい研究課題や仮説としては、以下のようなものが挙げられる。この仮説については、事前の授業を通じて、学生ともある程度共有できていたと考える。

- 1) 中国の農家楽の成功は、中国の高度経済成長を原動力としたところに主要因があるのか、それとも日本も見習うべき様々な工夫があるのか？
- 2) 農家楽の成功の中で、農村の農民はどう変わったのか、幸福となったのか？（幸福の定義は難しいが。）
- 3) 農村研究を通じて、産業の振興とまちづくり、人々の幸福の追求はどのような関係にあるのか、何か考えるうえでの手がかりはないか？

これらの研究課題や仮説をベースとして、前述したプロジェクトの狙いがデザインされることとなった。また、このプロジェクトの教育的な意義としては、もうひとつ、当然ながら、他国の学生や人々とどのように具体的に交流し交歓しでつながりを作っていけるか、という国際交流としての学びもあることである。

3. 調査活動のデザインと検証-農業と人の関わり

(1) 国際交流プログラムの概要

大学の国際交流委員会が企画・実施した学生の中国研修プロジェクトの概要と実施結果を報告する。中国での詳細な日程については、中国側が設定してくれた。

引率教員2名(平野真、張明軍)、参加学生4名(2年生)1名(4年生)

訪問先:劉鳳教授(西南交通大学公共管理与政法学院)(本学客員教授)

日程:9月8日夜、中国成都到着

9日:午前:竹里道明村視察、午後:幸福公社視察

10日:三聖花郷(五金花)村視察

夜、西南交通大学にて平野が地域問題について英語で講演

11日:成都の観光施策調査のため、パンダ基地・三星博物館視察

西南交通大学教授陣との懇親会(平野のみ)

12日:明月村視察

夕方:日中の学生が地域問題について英語で発表と議論、

続けて交流会(和紙灯籠ワークショップ)

13日:中国文理解のため、杜甫記念館・武侯祠博物館視察

夜、送別会

14日:早朝、成都発

(2) 農村視察

成都是、農村の貧困を克服するため農業に特産物販売や観光産業などの第三次産業を結びつける「農家楽」の開発で近年中国でも特に有名な地域であり、中国での先進事例であるだけでなく、日本の地域振興にも大きなヒントになるという予測から視察調査を行った。実際に、目を見張るような産業振興が多数行われており、農村の繁栄ぶりも日本では考えられないようなレベルのものが観察された。特に、一口に第三次産業との融合と言っても、成都近郊だけでも様々な具体化がある。各村の発展モデルは、その村ごとに自然条件、歴史的経緯などに大きく左右されて編み出されており、一概にどのモデルがいいと言った比較は妥当ではないだろう。今回の取材の対象としては、以下の4種の事例がある。

- (1) 村固有の自然資源である竹を中心に、様々な竹製品の開発で飛躍的發展を遂げた竹里道明村の事例、
- (2) 多様な製品開発を特にデザインに注目して進めた幸福公社の事例、
- (3) 花卉産業の導入とこれに伴い花園観光を展開し、さらに都市の企業資本を導入して一大リゾート地域の開発に成功した三聖花郷(五金花農園)村の事例
- (4) 古典的な農業と伝統的な陶芸、そして外部から移住した若い芸術家たちの活動という3つを上手く調和させた明月村の事例

このうち明月村では、学生の中に「ここにずっと住んでみたい」という声が上がったほど、魅力に富んだものであった。学生たちはこうした先進事例を学ぶとともに、現在成都市が新しい産業の核と位置付ける観光産業の実情を視察した。

中国の大学関係者によれば、現在成都には、世界のベスト企業 500 社のうち、300 社の工場があるといわれ、工業による経済発展が中心であるが、三星遺跡、パンダ繁殖基地、杜甫記念館、武侯祠博物館など多くの歴史遺産や観光資源にも恵まれており、農村の観光産業化とともに、今後成都行政府は観光産業に力を入れ、大学とも協力して観光人材の育成に注力するという。

今回の研修で、学生は、中国での農村振興の先進事例を多数視察した。またこれと関連して中国の観光事業についても、様々なパターンを視察学習した。今回訪問した成都是、近年の高度経済成長で、都市部のみならず農村の繁栄ぶりも日本では考えられないようなレベルのものが観察された。以下、概要を紹介する。

(2-1) 竹のデザインが特徴的な崇州竹里道明村

成都郊外の崇州市にある竹里道明村の竹工芸は 2000 年の歴史を持ち、中国の無形文化遺産にも登録されている。現在約 300 人の村人が住んでいるが、毎日平均 500 人の観光客が訪れるという。竹工芸を村のブランドとして定着させ、工芸体験や竹細工販売などで観光客を引き寄せている。崇州市行政府も、農業、商業、文化、旅行、体験という 5 つの要素を融合させた活性化策を打ち出し、特に力を注いだのは、外部の芸術家の流入による竹工芸の芸術化とブランド化であり、これにより約 4000 種類もあるという竹工芸製品の価格が大幅に上昇した。村全体をブランド化するため、村に竹工芸の博物館を立てたり、同済大学に設計チームに村を象徴する斬新なデザインのシンボル建築を作ってもらったりした。この建物は模型がベネチア・アート・ビエンナーレに出品され話題を呼んだという。村では、外部のデザイナーや芸術家、文化人、経営者を「新村民」として積極的に受け入れ、イノベーションを誘発しているという。外部から来た人々は、様々な文化活動を観光に結びつけ、村の発展をもたらしている。また行政の支援で、村民が家の色や素材を統一し、庭の壁の高さも低くして観光客が内部を見れるようにするなど、町の景観を整備し、村のブランド性を高めるように仕向けていったという。こうした修景事業は、最初は村民の全額出資により行い、徐々に経費を返金していくシステムだということである。はじめは出資をする村民は一部であったが、こうした修景事業により、村の観光客が増えたり、実際に綺麗になった村を目で見ることにより、徐々に事業へ参加する村民も増えていったようである。現在は、1 日に 500 人も観光客が来るようになったという。

現在、市場で流通している道明竹工芸の種類は約 4000 個、四川省全市場の 90% 以上の竹製品は道明鎮産であるという。時代に合わせて、道明鎮の若い世代の竹工芸職人は現代のテイストを取り入れ、伝統工芸と現代アートとを融合し、斬新な竹工芸製品を開発し、現代の消費者に受け入れられ流ようになったという。また、美術大学の工芸研究講師を招き、新たな竹工芸の手法、工程を学び、竹工芸の製品の工芸性を高めたとのことである。こうした努力により、製品の芸術価値を高めることができ、また従来の農産品だけでなく、家具、竹工芸のおしゃれバック、ライト、茶器、絵等も作成するようになり、結果として販売収入が大幅に上昇したという。



図 1. 竹里道明村風景



図 2. 竹里道明村の竹工芸

(2-2) デザイン力を重視する幸福公社

道明竹芸村の近郊に、幸福公社という企業が中心になって開発した村がある。ここは 2008 年の四川大震災で被災し、幸福公社はその復興を目的として設立された民間企業である。震災からの復興は巨大な宅地開発事業としての要素を持つ。第一段階の投資で住宅を建て、第二段階の投資で商業施設、別荘、ホテルなどを建設し、第三段階の投資で農業基地へのテコ入れを行い、同時にスポーツ施設、図書館、医療センターなどのインフラ整備を行っているという。全体で一種の人工的なコンパクトシティのような地域を形成している。幸福公社の開発戦略は、農業、芸術、文化などをベースに村を観光地化し、様々なビジネスを起業家の創意に基づいて展開し、村全体のブランド化で土地の価格を上げ、そのことで村民の収入も増やし豊かになっていくというものである。竹里道明村のように核となる特徴はなく、逆になんでもありの総合化戦略で発展を目指すというものである。ただ、全般にデザインへのこだわりは強く、町の景観に様々な芸術的な工夫やデザイン化を取り入れ、ブランド作りに

役立てている。ここでも、経済発展の基礎としての「人」の重要性を意識し、外部から流入した人々の個性を尊重するようにしている。この点は、後述する明月村とも共通するところがある。

幸福公社の不動産開発事業は、日本における不動産会社の都市開発や宅地開発と共通する点もあるが、違いは地域の経済活動の活性化であり、単に居住者たちの生活の利便性を向上させるだけでなく、このエリアが産業的にも自立し自ら発展を遂げていけるようなまちづくりを行っているという点である。一方、そうした産業活動の主役は外部から来た起業家たちが主体であり、元々の居住者であった村民は、逆に土地や不動産を貸して生活を立てるものも多いという点が、次に述べる五金花村の現状と重なってくるものがある。



図 3.幸福公社の開発した街並み

(2-3) 経済成長のめざましい五金花村（三聖花郷）

五金花村は、前述の予備調査の記述でも述べたように、酸性の土壌で農業に向かず、極貧の農村であったが、観光化で飛躍的に発展した有名な地域である。もともと湿地だったところも多く、300年前からレンコン栽培などを行う農家も多かった。当初、女性の村長が米国資本の会社に土地を貸して花の栽培を行わせ、これを村の観光地化が起こり、桂（2010）によれば、五金花村は2004年当時で人口13000人、2008年までの5年間に、農民の平均所得は、約4000元（7万円）からその3倍に増えている。

現在、村の中に、バスの路線は16もあり、地下鉄の駅もあり、5つの村全体では観光客が年間1200万人あるという。

当初は地元の農民自身が経営するペンションやレストランが多かったが、現在は、五金花村の多くのレストラン、ホテルなどの店は、政府からの補助金を受けながら成都市内の企業が運営しているものが多く、特に精華大学卒の企業家の運営するある会社は、かなり広域的に経営を行っているという。

こうした店への顧客は、成都だけでなく四川省の人々が多く、経営者も成都のみならず四川省から広く流入しているという。主に、土日の顧客が多く、四川省の人々が大好きな麻雀ができる店が多い。

訪問したあるレストランでは、外国からバラを輸入して飾り、婚約パーティーの会場などとしても運営していた。また、ある木工店では、地元の木材のみならず、やはり外国から国材を輸入してカスタムメイドの高級家具を作り、地域のレストランやホテルに納品するほか、明や清時代の古い家具の修復なども漆の技術を駆使して手がけていた。地元産の家具も扱うが、基本は収益性の追求があり、産地にかかわらず売れるものを持ってきて売っているという。

村民は、自ら店舗を経営するものもいるが、現在は、土地を貸して、隣接する住宅地に移り住んでいる人が多いという。村全体の急激な経済発展の結果、いまは企業が店舗を運営し、花を育てている場合も多いという。村の中にある四川省最大の花卉市場を訪問すると、地元市民のみならずつ動く国内全域に花を売っており、ここだけで年商7億元（120億円）とのことであったが、これは外部企業の経営である。地元の栽培の花だけでなく、雲南省から花を買ってきて取引もしているという。レンコン栽培と店舗経営を並行する農民もいるが、レンコンの花は6～7月しか咲かないので、冬の観光客が少なく、店舗に集中する場合より年収は悪い。村の全店舗数約310のうち、花関係の店は100ほどだという。

農民は全般的には経営が下手な場合が多く、政府が1km²あたり年間160万元（2500万円）程度を農民に給付し、土地を借りて100%政府の力で運営するケースも多いという。開発当初は農民の生活向上を目的として政府が支えたが、その後企業が投資するようになり、土地を企業に貸す農民が増えたという。昔はこの土地の出身者であることが恥ずかしく隠す人が多かったが、現在は大金持ちになった人もおり、一番大きい農家楽を経営している人は、年収1000万元（1.7億円）もあるという。普通の農家楽でもその十分の1程度の収入があるという。こうして農民はかつては考えられないほど豊かになったが、一方で多くの農民は農業を捨て、土地や不動産を貸してその収入でマンションに住んでいるものが増えているという。そういう意味では前節の幸福公社と似た農村の都市化や農民の生活向上が進んでいる。



図5. 三聖花郷（五金花）村のレストラン（婚約パーティーなども行われるという）



図 6. 左：木工店（外国からの輸入木材も使う、高級家具修復も手がける）

右：花市場（地元で栽培した花を、外部だけでなく、市民にも売っている、雲南省など外部からの買い付けも行う）

(2-4) 陶芸でも名の知れた明月村

明月村は、ゆず、桂花、筍、茶、キューイなどの農作物を今でも生産している農村でありながら、300年ほど前から、生活工芸を中心に陶芸技術も発展したという。一時は、製作した陶器の販売でも一定の収入となっていたというが、その後、陶器の価格も下がり販売はあまり振るわなくなっていたという。

しかし、外部の芸術家が村に移り住み、より現代的な陶芸を作りようになっただけから、陶器の販売が持ち直したという。そのことで、村の人々も芸術家たちを進んで受け入れるようになり、村の人々と芸術家の共生が始まったという。その後、陶芸だけでなく、様々なジャンルの芸術家が村に済むようになり、様々な活動を展開するようになった。ある30代の写真家は、村の生活の記録と村の人々の生活の美しさを表現することで村人の心を元気づけることも意識しているという。この写真家の写真を飾った小さな美術館が建てられ、これも観光に寄与するようになった。現在、陶芸体験や、農業体験などが観光の素材となり、農業・陶芸・観光が調和して村の経済を支えている。外部の若い芸術家の移住によって、村の開発が豊かな発想と町の美化（デザイン化）が持ち込まれ、村の人々の意識も前向きで学習意欲に富んだものとなっている。村の人々が積極的に陶芸技術を身につけるようになった。村人は、外部からやってきた芸術家たちに家を貸しや家賃収入を得、自分たちはマンションに移り住んだりしているという。芸術家たちが来て、村の観光化（体験陶芸など）が進み、村のブランド化も行われて、村の筍の価格も昔の2倍のkgあたり7元となった。農産物の売り上げも増え、村人たちは芸術家たちに感謝こそすれ、拒否反応は全くなかった。現在、村の名誉村長として活躍する30代の女性も、やはり外部から移住したということだが、日本の「大地の芸術祭」なども視察してきており、村の新たな発展に様々なアイデアを出し、これが政府に認められて行政の支援を受けて

実現しているという。

2009年の時点では、成都の中でも明月村は貧しい村であり、平均年収は5000元（8万円）以下であったが、現在はその4倍になっている。

現在、村では、「人づくり」を村の基本に据えており、多様な芸術家を尊重している。村の若者たちも、大学などのため一時的には村を出るが、また村に帰ってきて村のために貢献する若者も多く、現在も30人ほどの若者が外部で勉強したのちに村に戻って働いているという。このうち20人は村で起業したという。また芸術家になった人もいるという。現在、村の人口は、約2300であり、現在増加しているという。60歳以上の高齢者は約200人、65歳以上のものは約150人ということである。現在の人口のうち、100人は外部からの移住者（若者だけでない）である。昔は出稼ぎで村から出て行く人が多かったが、村の経済が立ち上がったいまは、出稼ぎで出て行く人はいないという。

村の説明員によると、村の繁栄は以下の3点によるところが大きいという。

- 1) 住民の素朴な心
- 2) 女性の名誉村長のリーダーシップ
- 3) 元々の村民と移住者で作る運営チーム

当初は、女性の名誉村長のアイデアが多く、政府の支援を取り付けていたが、現在はトップレベルの方針は政府が立て、具体的な細かいアイデアは村民が出すようになってきている。また最近、外部のコンサルタントが協力しているという。投資効果などの細かい経済分析はしていないが、農産物のブランド化が進み、以前は地産地消だった地鶏なども現在は外部に売れるようになったという。

村民が感じる村の魅力は、以下の3点であるという。

- 1) エコシステム（自然が豊かで農業が継続している）
- 2) 人の素朴さ（隣同士で助け合う）
- 3) 歴史的遺産（いままでの発展）



図7. 左：明月村入口 右：観光用バス



図 8. 左：豊かな農園 右：陶芸体験教室

(3) 西南交通大学の学生との発表討論会

本学の学生たちは先進事例の視察ののち、中国の大学で中国の学生に対して英語で日本の地域問題をプレゼンし、英語で中国の学生と双方の地域問題について意見交換した。

日本の学生たちが取り上げた課題は、女性の社会進出と少子化問題、農村の過疎高齢化による限界集落化、農村での耕作放棄地問題などである。特に、農村の問題については、各学生が自分の出身地の村の問題を取り上げ、切実感のある問題として一人称で語る、というものであった。

中国側の学生は、農民工問題、農村の観光地化などについて発表した。農民工問題では、農村を出て都会で働く農民工が生き延びていくためにたとえ違法であっても自分たちの力でできる小ビジネスを展開している現実を述べ、中国の農村問題の現実を率直に述べていた。

質疑では、若者の地域に対する価値観の問題から始まり、日本の農村の過疎高齢化問題に対して、中国の学生から、「過疎化を克服するために外国の移住者を受け入れるのはどうか」という質問がでた。これに対して、日本の学生は正直に言えば、「たとえ過疎化を克服するためであっても、外国人が大勢流入するということに対しては抵抗がある」と述べ、逆に「中国の学生は同じように自分たちの村や町に大勢の外国人が流入することに抵抗はないですか」という逆質問が飛んだ。これに対して、中国の学生も、「率直に言えば、やはり割り切れない思いを持つ」ことを吐露した。これらの討論に見え隠れするのは、日本の学生も中国の学生も、むらづくりやまちづくりにおいて、単に過疎化や高齢化や産業の低迷が防げればいいというのではなく、やはり自分たちの村や町といった生活空間に、何らかの精神的なつながり、文化や価値観の共有といったものを求めているという実態である。こういった感情や感覚は、おそらく若い人たちだけでなく、年配の方々にも同じように、いやむしろ年配の方々により強く存在しているのではないかと推測できる。無論結論は出ないにしても、日中双方の学生たちが本音を出して議論しあったこと、こうした意識を討論を通じて自己認識できたことは有益であった。



図9. 左：中国の学生の前で英語で発表する本学学生
右：発表に聞き入る日中の学生たち

4. 省察、そして新たな課題

教育研修プログラムの狙いとしては、

- 1) 日本と中国の共通課題としての農村活性化：農村の活性化は中国と日本との共通の課題でもあるが、そこで取り組み方の類似性と相違点を観察し、どのようなことが学べるのか学生に考えさせる、
- 2) 日本と中国の差異：グローバル化の中で新興国として産業発展してきた中国の経済成長を日本の衰退と比較しながら、どのような点が逆に学べるか学生に観察・考察させる、
- 3) 産業とまちづくり：福知山市をはじめ多くの地域活性化問題でひとつの課題として浮き上がってくる「産業発展/産業衰退とまちづくり」という問題について、中国の農村や都会の事例がなにか参考にならないか、学生に考えさせる、

といった点があったが、実際に学生たちの感想文の中から、学生たちの「気づき」や学習がどのようなものであったかを検証する。以下学生達のレポートから、いくつか転記しよう。

(1) 農村の活性化に関して

視察した農村の特徴として、日本の農村には中々無いこととして、学生が指摘したことは、村の個性の明確化とそれを誇りに思う気持ち、それに基づく村のブランド化、ブランド化の基礎となる「人」の重視といったことであった。これらの点は、まさに平野が課題解決型人材育成の初期の活動で意識した点と奇しくも一致している。以下、学生の感想文からの抜粋である。

- 今回の中国の農村視察では、4つの村を回らせていただいたが、どの村も特色が分かりやすく、

村の至る所にその特色が出ていたと感じた。

例えば、3日目に行った道明・竹艺村では、村の名前からわかる通り「竹」を使ったお土産品から生活用品、「竹」をモチーフにした案内標識などが見れた。また、五金花村では道路の脇で花を販売する商人がいたり、多肉植物専用の大きな市場があったり。更に、農家の家を改築したレストランが多く、入ってみると植物が多く、村の名前の由来が分かりやすい、と感じた。

●(崇州竹里道明村は)元々生えていた竹林をベースに竹素材を生かした建物があるという点が興味深かった。この村の強みは竹であると象徴するように、いたるところで竹をアレンジした物や内装を施しているところが日本の参考になる。

●(今回訪問したすべての)村に案内人がいることと、博物館があることだ。これは、日本の農村によくみられることではない。この二つは、観光客を呼び寄せてそれによって収入を得るために必要なことだと感じた。

●幸福公社の開発を行う会社の社長さんにお話を伺った。芸術と観光を結びながら村づくりを行い、農村の空洞化、人材の空洞化を防いでいるそうだ。

デザインを最重要視している点が興味深かったし、(中略)「人材の空洞化を防ぐ」という史御力さんの考えから感じた人材の大切さにも重きをおいていることが日本の地域に参考になる。

●(明月村では)石で河原の淵を形作っていたり、竹をおしゃれに組み込んで畑の境界を示していたりする点から芸術を感じ、優れていると感じた。訪れた人に住みたいと思わせる村であることが日本の地域に参考になる。広い畑で多くの作物を栽培している点は日本の農村に共通しているが、展示物や大きな写真がある施設があることは日本と異なっていると感じた。

●今回の研修では、農村振興の先進事例を視察して、日本も実践すべきだと感じたアイデアをたくさん発見することができた。私たちが訪問した村は、人を惹きつける力がある村だった。惹きつけられる理由は、村づくりに携わる人材が持つ能力の高さとアイデア力だと思う。日本の農村が学ぶべき点はたくさんある。

●今回、各村の人の話を伺うことができたのだが、どの人も自分の村に問題点はあるが、卑下することもなく誇りを持って話している姿が印象的だった。日本の村でお話を聞くと、大抵は「この村には何もない」「魅力がない」と悲観的な言葉が出る。このような堂々とした語りができるからこそ、村を発展させる原動力になっているのではないかと。



図 10.明月村のまちづくりにおけるデザイン性の重視

(2) 日本と中国の差異

日本では、今まで中国を「新興国」という呼び方をする場合が多く、これは従来の先進国と開発途上国といった観点の延長と考えられるが、現在の中国は大方の日本人の想像以上に、経済面や都市化、そして技術導入やデザイン志向などで日本以上に進んでいる面が散見される。こうした点に、学生たちも気づいていった。そして特に印象深かったのは、やはりこれから成長を目指そうという中

国の若者たちの積極的な機運が、日本の若者の消極的な気持ちと非常に対照的であるという点である。以下、学生たちの感想文を引用する。



図 11.観光地におけるデザイン性の重視

●今回、視察に行った観光地では、その観光地に合わせた建物や装飾があり、観光地一体となっているのが印象に残った。例としては、パンダ基地の中の道路を挙げる。パンダが展示されている場所まで数キロ歩かなければいけないのだが、その道の脇には細い竹が沢山植えられており、竹のトンネルみたくっており、とてもキレイだった。また、パンダ基地の外にあるバス停やタクシー乗り場近くの道でもパンダの足跡があったり、近くの小学校の壁にはパンダの絵が描かれていたりなど、まさに観光地一体となって探すのがとても楽しかった。また、三星碓博物館では、ゴミ箱が展示品に合わせて石で作られていたり、かなり凝った作りになっていた。

●基本的に成都市内には低価格のシェアバイクが普及しており、市内を観光しやすい環境だと感じた。

●中国では近年、現金を使わず、アリペイや微信(Wechat)を使った電子決済が普及しており、ショッピングだけではなく、観光地の入場券や地下鉄、シェアバイクの支払いなどにも使われており、安心して観光できるようになっている。

●各観光地では音声ガイドが有料で借りることができる。ボタンを押してガイドを聞くタイプもあったが、その場所に行くとも自然にガイドが流れ、行っていない場所を表示してくれたり、とても分かりやすかった。



図 12. 観光地における WiFi ガイドデバイス

(まだ観ていないスポットだけが点滅、そのスポットにいくとも自然に音声ガイドが始まる)

●(中国は)国としても発展している中、手探りで自分たちの生活を良くしようと動いている人が多いと感じる。法律が未整備な分野も多い為、色んなことにチャレンジできる環境だと思う。

特に若い人の行動力がすごいと感じる。都市だけではなく、農村など地方においても若い人が大学を出て村に戻ったり、あるいは村にきて起業したりと、チャレンジ精神や原動力が大きい印象を受けた。

●中国の大学の授業は朝から夜まで、ぎっしり詰まっているという。大学の敷地内に学生寮があるため、朝早い授業や夜遅い授業を行い、受けることができる。(中略)現状に満足するだけでなく、海外の教育現場でも学ぼうとする向上心は、とても見習うべきところだと思った。

(3) 産業とまちづくり

非常に興味深かったのは、中国における農村活性化としてはベンチマーク的な存在として知られる五金花農園(そして幸福公社)であった。この村の調査から得られた知見をもとに、この村の経済発展についてまとめると、以下のような点があげられる。

- a) 農民は、いわば農業の6次化である農家楽(観光、商業)の導入により、極貧から救われた
- b) その「地域」は経済発展し、所得も生活水準も著しく向上した。一方で、一部の農民は収益性の悪い農業からは撤退し、完全に観光、商業により生計を立てる者が増えた。また豊かになったとはいえ、政府や企業に土地を貸すだけになっている人もいる。
- c) 結果として、現在この村には、地理的人口流出、過疎高齢化、インフラ崩壊、産業崩壊などの日本の典型的な「地域問題」は存在しない
- d) しかし地域の農業人口は激減し、村の人間関係もかなり失われているようにうかがわれる(村全体が都市化した)。

無論、この村の以前の状況からすればこうした経済発展は奇跡に近いことであり、当然農民にとって素晴らしいことであり、何も批判めいたことなど述べるつもりは全くない。農民の農業からの転出についても、人口の半分以上が農民であるという中国の現実の中では、日本とは全く異なる意味を持つと考えられる。また、中国の大学関係者が強調していたのは、現在の姿が理想なのではなく、あくまで長期的な発展を考えたときの過渡期に過ぎないという点であり、将来的な村のイメージについてはかなり長期的な視点で考えねばならないという。成都市全体あるいは四川省全体、あるいは中国全体の農業政策の中でこの村をどう位置付けているか、といった点はまだ調査できていないので、安易な物言いはできないが、観光や小売による経済発展が成功すればするほど、一方で地球全体の中の農業という産業の保持や、持続可能な「地球(社会)」との関係を考えた時、いろいろ考えさせるも

のもあるように感じた村であった。例えば明月村のようなところでは、農業そのものと観光、小売、文化、芸術といった様々なものをすべて融合・調和させるなかで村の強みを見出していくような施策が見られていたが、五金花農園の場合、経済発展の度合いが大きくその分、農業の占める位置はかなり減退しているのではないかと感じられた。

五金花農園の発展を、中国の中での位置付けではなく、あえて日本の「地域問題」に引きつけて考えると、いわゆる過疎高齢化や人口流出を「地域」の課題としてとらえる人々にとって、守りたいものは「自分の土地と自分の生活」なのか、あるいは「社会のための仕事（使命としての農業、人間としての生き方）」なのか、といった人の生き方にも関係してくる問題が垣間見えているのではないだろうか。これは、商店街における産業の盛衰と、まちづくりをどう考えるのか、といった問題にも繋がってくるテーマでもあるといえる。

学生たちは、中国の学生との討論会で、「農村の過疎高齢化、人口流出、耕作放棄地」が問題であるといいながら、中国の学生の質問として、「それではその村に外国人がたくさん移住して人が増えれば問題は解決するのか?」といった鋭い問いに、答えられなかった。正直に言えば、大勢の外国人の移入には、どこか抵抗を感じるという。これは、地域の課題が単なる経済的な向上や人口維持ではなく、文化や価値観の共有や維持といったものと大きく関係していることをうかがわせる。一方、同じ問いを中国の学生たちに返せば、中国の学生たちも、もし自分たちの地域やコミュニティに文化の異なる外国人が大勢移入してくれば実は同じ戸惑いを感じてしまうという。

この学生たちの議論は、現在「地域課題」といっている「課題」の本質がどこにあるのか、単に自分の財産としての土地を守ること、経済生活を守ることなのか、なにか帰属している集団の文化や価値観のようなものを守りたいのか、あるいはより広い地域や社会への貢献意識や帰属意識をもったものなのか、といった疑問を浮き彫りにし、大きく捉えれば、産業的ないし経済的活性化の問題と住民のまちづくりや幸福感の追求の問題とがどのように調和していくのか、といった問題を提示している。

以下、学生が書いた感想文に学生が「住みたい」と思う町の姿がどのようなものなのか、そのことから逆算して見える学生の望む「まちづくり」のイメージが見えてはこないだろうか。

●明月村では、自然資源が豊かで歴史的価値をもつ村であった。綺麗に整備された茶畑や道路、またゴミの分別の注意書きが置いてあり、村の景観はとても美しかった。広大な土地には、茶畑などの畑や果物、様々な木々がみられた。村には図書館や展示物を飾っている施設、陶芸などの工房や食堂などの設備が整っていた。この村の写真家の方は、写真を撮ることによって村の人たちが自分の村に誇りを持ってもらうとおっしゃっていた。それは、村を発展させていく上で、最も大切なことだと感

じた。明月村は静かで町の喧騒から離れて、ここに住みたいと感じさせる村であった。



図 13. 明月村での日中の学生たち

この学生は、さらに都市と農村の魅力の違いについても以下のような記述をしている。

●今回は成都市という中国の一都市しか見ていないが、人の交流や移動が活発であると感じた。成都市は活気があり、街を歩いていると道を教えてくれた人もいた。それに対して、都市から離れるととても静かで、時間の流れがゆっくりと感ずることができた。農村経営にしても政府が補助し、企業や投資家はそこにチャンスがあれば積極的に介入しているように感じる。都市の賑わいと、地方の静寂。このバランスが今後どうなっていくのか気になる点であるとともに、街の喧騒を忘れさせてくれる農村の需要がこれから高まるのではないかと考える。

そしてこの学生はさらに今回の研修の成果を次のような明快な言葉でまとめてくれた。

●今回の研修は私にとって初めて経験することがたくさんあり、見るものすべてが新鮮であった。私は農村視察にとっても関心があった。私の地元は石川県珠洲市で田舎である。中国の農村の先進事例を知ることで、その取り組み内容が生かせるのではないかと期待していたからだ。実際に視察してみて、正直、規模の大きさや芸術性の高さに圧倒された。町や村を活性化させる原動力は、住民が自分の町・村に誇りを持つことだと思う。今回視察した農村ではそのための取り組みとして、1つのテーマやシンボルを深く掘り下げブランド化することや、商品の開発、芸術の浸透、農家の家の活用、博物館・図書館など施設の設置などの取り組みがなされていた。また、景観を統一化させていた。農村の先進

事例の取り組みをどう生かしていくかはこれからの大きな課題である。

この研修プログラムを通じて、学生たちは新たな課題への気づきとして、産業とまちづくりの問題により深く直面していくことになった。今後、その課題をさらに学生ごとに発展させ追求して行ってくれることを期待している。

5. おわりに

日本と中国の地域問題とその解決方法について、類似性と差異を明らかにすることを念頭に、中国四川省成都近郊の4つの農村を大学生とともに視察・調査した。4つの村、ともに農家楽による経済発展を遂げた点は類似しているが、その発展形態はそれぞれに異なる特質を持っていた。

- 1) 村固有の自然資源である竹を中心に、様々な竹製品の開発で飛躍的發展を遂げた竹里道明村
- 2) 多様な製品開発を特にデザインに注目して進めた幸福公社
- 3) 花卉産業の導入とこれに伴い花園観光を展開し、さらに都市の企業資本を導入して一大リゾート地域の開発に成功した三聖花郷（五金花農園）村
- 4) 古典的な農業と伝統的な陶芸、そして外部から移住した若い芸術家たちの活動という3つを上手く調和させた明月村

こうした先進事例農村の経済発展を見て、学生たちの気づきとして以下のようなものがあった。

- 1) 視察した各村では、村ごとの歴史や文化といった「個性」を大事にしてそれを宣伝していた。
- 2) どの村にも博物館や美術館があり、日本の多くの村以上に「文化」を大切にしていた。
- 3) 歩道や看板などいたるところで、「デザイン」に工夫を凝らしていた。これが、居心地の良さに結びつき、観光や移住に効果的に働いていた。また観光地でのWiFiデバイスの活用や2次元バーコードとスマートフォン活用によるキャッシュレス化など、先進の「技術」の導入も日本以上に進んでいる面があった。
- 4) 外部の人を受け入れ、多様な「人」を尊重し、特に外部の芸術家などの力を借りて、村の特産物や観光に取り入れ、経済発展の資源としていた。

日本の農業の6次化では、農業と加工業や小売りなど産業での連携が主であるが、中国の場合、これに文化や住民の歴史、芸術などを組み合わせ、効果的に地域の固有価値を観光や特産物生産に結びつけていた。その基礎として、一方で外部の人や文化に対してもオープンに受け入れ、過去の村の文化と外部の人が持ってきた文化と、尊重しあいうまく融合しながら、村の発展に結びつけるということが行われていた。

中国の学生との討論では、農村の過疎高齢化と人口流出を解決するために大勢の移民が流入することについての是非が議論され、双方の学生とも、そうした解決策には戸惑いを感じるというのが率直な感想であった。これは、まちづくりという観点から見ると、地域の経済発展や人口の維持といった問題と、その地域の固有の文化や価値観などの維持や共有をどのように両立させていくのか、という問題が絡んでおり、上記の成功例がどのように行われていったのか、さらに詳細な研究が必要であることを示唆している。

一連の調査と討論を通じて、学生たちは、国境を越えて地域問題を考える重要性和、他国の人々との交流や交歓の重要性、そのための語学などのコミュニケーション力の向上の必要性、などにも気づいていった。福知山公立大学はそのミッションとして「グローカリスト」の育成をうたっているが、こうした研修プログラムがまさにそうした目的に直結していることが改めて感じられたことであった。

謝辞

本教育研究の遂行にあたり、中国側で献身的な準備と心温かいもてなしをしてくれた西南交通大学の劉鳳教授をはじめとした教授陣の方々、学生の方々、また各地の村で親切に対応してくれた村の関係者の方々に深く御礼申し上げます。こうした教育研究を通じた国際交流が、両国の絆をますます強いものとしてくれることを祈念します。

《参考文献》

- 1) 陳桂棣、春桃(2005)「中国農民調査」文芸春秋
- 2) 江口伸吾(2006)「中国農村における社会変動と統治構造—改革・開放期の市場経済化を契機として」国際書院
- 3) 深尾光洋(2006)「中国経済のマクロ分析」日本経済新聞社
- 4) 巖善平(2009)「農村から都市へ—1億3000万人の農民大移動」岩波書店
- 5) 平野真、劉鳳(2010)「グローバル連携による地域事業価値創造過程—日本と中国の花卉関連事業事例から」組織科学、Vol.43, No.3, pp.33-42
- 6) 方琳(2015)「中国浙江省におけるグリーン・ツーリズム農家案に関する研究—日中におけるグリーン・ツーリズムの比較から—」岩手大学連合農学研究科生物環境科学博士論文
- 7) 今永清二(1968)「中国の農民社会—その風土と歴史」弘文堂新社
- 8) 石田米子(1974)「中国の革命—農民のたたかひの歴史」評論社
- 9) 岩田勝雄・陳建編著(2005)「グローバル化と中国経済政策」晃洋書房

- 10) 川島博之(2010)「農民国、中国の限界」東洋経済新報社
- 11) 川島博之(2012)「データで読み解く中国経済」東洋経済新報社
- 12) 桂英、橋本卓爾、藤田武弘、山尾政博、細野賢治(2010)「中国四川省における農家楽を中心とした農村振興—成都市近郊の「五金花」を事例に」(農業市場研究、vol.19,no.2, pp.41-47。
- 13) 森下裕之、宮崎猛(2008)「中国における棚田農業の保全と農家楽」農林問題研究、44巻、1号、pp.256-261
- 14) 21世紀中国総研編(2016)「中国情報ハンドブック」蒼蒼社
- 15) 王文亮(2003)「中国農民はなぜ貧しいのか」光文社
- 16) 王文亮(2004)「九億農民の福祉—現代中国の差別と貧困—」中国書店
- 17) 大牟羅良(1958)「ものいわぬ農民」岩波新書
- 18) 大橋英夫(2005)「現代中国経済論」岩波書店
- 19) 李昌平(2004)「中国農村崩壊～農民が田を捨てるとき」日本放送出版協会
- 20) 劉岩(2017)「伝統的資源活用型観光地における観光客の意識に関する研究：中国成都市を対象として」山梨大学医学工学総合教育部博士論文
- 21) 劉蘭芳(2013)「中国における農村資源を活用した観光開発による地域活性化に関する研究—遼寧省における都市近郊農村及び中山間地域農村の意識調査を通じて—」東洋大学大学院 国際地域学研究所国際地域学専攻博士論文
- 22) 佐々木信彰編(1997)「現代中国経済の分析」世界思想社
- 23) 佐々木信彰編(2000)「中国経済の展望」世界思想社
- 24) 佐々木信彰編(2001)「現代中国の民族と経済」世界思想社
- 25) 関満博(1996)「中国市場経済化と地域産業」新評論
- 26) 唱新(2002)「グローバリゼーションと中国経済」新評論
- 27) 高橋満(2004)「中華新経済システムの形成」創土社
- 28) 展鳳彬(2008)「中国の新型観光農家楽—四川省・成都市を事例に」同志社大学大学院政治経営 pp.241-246
- 29) 塚本隆敏(2010)「中国の農民工問題」創成社